

ペンテコステ礼拝説教「ここにも、どこに行っても」

日本基督教団石神井教会 2018年5月20日

【旧約聖書日課】ヨシュア記 1章1～9節

1主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。2「わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。3モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。4荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。5一生の間、あなたの行く手に立ちちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。6強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。7ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。8この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。9わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

【使徒書日課】使徒言行録 2章1～11節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。5

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、バルティア、メディア、エラムからの者があり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」12人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。13しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

「聖霊よ、来たりたまえ」

聖霊降臨を祝う今日、皆さんのもとに、新しい聖霊の風が吹き込んでいらっしゃるでしょうか。大きく心の窓を開けて、天より吹き降ろしてくる聖霊の風を迎えてくださっているでしょうか。「聖霊よ、降りたまえ」、「聖霊よ、来たりたまえ」と讚美を歌いながら、皆さんは、どのように聖霊が降ってくださる様を、どのように聖霊が来てくださる様を、今、ご覧くださっているのでしょうか。

ペンテコステおめでとうございます。クリスマスやイースターと比べると、「おめでとうございます」の挨拶が慣れない祝いの日かもしれません。けれども、わたしは、皆さんに声を大にして申し上げたいと思います。ペンテコステです。クリスマスよりも、イースターよりも、もっと大きな声で、「おめでとう」と祝いの挨拶を交わしましょう。なぜならば、ペンテコステこそ、クリスマス以上に、わたしたち自身に大きく関わる祝いだからです。イースター以上に、他の誰でもない、わたしたち自身のことを祝う祝いだからです。

もちろん、わたしたちは、ペンテコステの祝いでも、何より神の御業を祝っているのです。クリスマスに御子をこの世にお送りくださり、イースターに御子を死の世界からご復活させてくださった神は、ペンテコステに聖霊をお送りくださいました。神が御自らの聖なる霊をお送りくださって、地上の弟子たちに満たしてくださったのです。わたしたちは、そのような神の御業を祝います。

けれども、その神の御業は、ただ二千年前の弟子たちの集まりで一度きり起こった出来事、というわけではありません。そのときから始まって、二千年間、主イエスの弟子として歩み始めた者の間で繰り返し起こってきたことなのです。いえ、今も、今日ここでも、起こっていることなのです。

歌い慣れないペンテコステの讚美歌で、「聖霊よ、来てください」と呼び求めた皆さん。わたしたちが神に願い求めるもので、これ以上に確かに与えられるものは、他にはありません。皆さんは、もしかすると、讚美歌の歌詞にそう書いてあるから、というだけの理由で、「聖霊よ、来てください」と口にされたのかもしれない。けれども、そう口にしたが最後、神は、皆さんに、聖霊をお与えくださるのです。もうすでに、お与えくださっているのです。皆さんには、今、聖霊が満たされているのです。

「そうは言われても、自分には、聖霊が満たされている実感がない」とおっしゃられるかもしれません。皆さんの中には、正直なところ、いつも「聖霊を感じない」と思っている、という方がいらっしゃることでしょう。わたしたちの、自分自身の中にある神を感知するセンサーは、とても鈍いもののようなのです。聖霊を感知するセンサーも、なかなか働きません。けれども、わたしたちは、自分の中のセンサーに頼る必要はないのです。そもそも、そのセンサーがあまりに鈍いので、主イエス・キリストという抜群のセンサーをお持ちのお方を必要としたのです。キリストのセンサーを通して、わたしたちは、神に触れ、聖霊を知るように導かれてきました。そのセンサーを、今、わたしたちは、主と結ばれる洗礼を受けた人、お互いの中に見るようにされているのです。

わたしにも、あなたにも！

わたしたちは、自分自身の姿を見ることは、あまり上手ではないのでしょう。「自分のことは、自分が一番よくわかっている」とおっしゃる方もありますが、本当にそうでしょうか。わたしたちは、大概、自分のことは、自分がこうありたいと願っているようにしか見ないのです。もちろん、願っているのとは全く異なるダメな自分の姿に気づいて自己嫌悪に陥ることもあります。自分の罪深さに気づいて、深く心砕かれることもあるでしょう。けれども、できれば、そういう自分をいつまでも見つめていたくはないのです。そのような自分の姿からは、できれば目を逸らしたいのです。自分の中の、こうありたいという願いが実現している部分だけを見ていたいのです。それは、仕方ないことでしょう。それで良いかどうかは別にして、わたしたち人間は、そういう者なのです。自分のことは、どうしても偏り見てしまうのです。

もちろん、他人のことも、別の偏りをもって見てしまうのが、わたしたちです。わたしたちは、家族にしろ、友人にしろ、ずいぶんと自分の「色眼鏡」で見ているものです。何かの拍子に今まで思っていたのとは違う姿を見せられて、びっくりさせられることが、わたしにはしばしばあります。普段、どれほど人のことを「色眼鏡」で見ているものなのかと、思わされます。

もっとも、わたしたちの目は、どこまでいっても、「眼鏡」なしにクリアに見えるような目ではないのかもしれませんが。「眼鏡」をかけないと、自分のことも、他人のことも、どんなことも、見えるようにはならない、というのが、わたしたちの「目」なのではないでしょうか。だから、少しでもまともな「眼鏡」をかけて、少しでもはっきりと見えるようになろうとしているのでしょう。

わたしたちは、他でもない、主イエス・キリストという「眼鏡」をかけさせていただくように導かれてきました。主イエスの目を通して物事を見、主イエスの目を通して自分のことを見、主イエスの目を通して他の人のことを見るのです。その主イエスが、ご復活の後に弟子たちに残して行かれた「眼鏡」の一つが、「ペンテコステの眼鏡」ではないでしょうか。聖霊を見る「眼鏡」です。聖霊が、激しい風が吹いてくるような音とともに天から降ってきて、炎のような舌の姿で分かれば分かれになって、一人ひとりの上にとどまるのを見る、そのような「眼鏡」です。

「ペンテコステの眼鏡」をかけましょう。すると、見えるのではないのでしょうか。互いのもとにとどまる炎のような聖霊です。皆さんが、今日、ペンテコステの祝いであることを憶えて身に着けて来てくださったかもしれない「赤」のしるしは、ただのファッションではないのです。「ペンテコステの眼鏡」をかけたわたしたちには、それは、確かに天から降ってその人にとどまり、満たしている「聖霊」のしるしなのです。たとえ「赤」いものを身に着けて来られなかったとしても、「ペンテコステの眼鏡」をかけたならば、わたしたちは、はっきりと見て取ることができるでしょう。お互いの一人ひとりにとどまる聖霊。皆に満たされている聖霊。その同じ聖霊が、この「わたし」にも与えられているのです。

どこに行こうとも…

今日、わたしたちは、この後に、一人の洗礼式を執り行います。そして、二人の堅信式を執り行います。三人のうち二人は、若い青年です。そしてもう一人は、年配の方です。しかし、三人とも、親を通して信仰の道へと導かれて来られました。そして、今、そのように導かれてきた信仰の道が、この「わたし」の歩むべき道である、ということをご自ら告白するときを、迎えられたのです。

堅信式をよくご存じでない方も多いかもかもしれません。わたしたちの教団では「信仰告白式」と呼ぶ場合もあります。たいていは、幼児洗礼を受けていた者が、一定の年齢を超えて、自ら信仰の告白をできるようになったときに受けるものとして、「堅信礼」が位置づけられています。伝統的な教派では、「堅信」は、「洗礼」に続いて必ず受けるべきものとされてきました。わたしたちの教団では、「堅信」は、通常は洗礼式の中に組み込まれていると考えているのです。実際、伝統的な教派でも、洗礼式の中で「洗礼」と「堅信」を一連の儀式として続けて行うところもあるのです。

皆さんに知っていただきたいのは、洗礼式の中に「堅信礼」が組み込まれているというとき、どこが「堅信礼」に当たるのかということです。堅信礼は、「父と子と聖霊の御名」を唱えて水を濯ぐという、まさに「洗礼」そのものが施される場面の直後に組み込まれています。式文の順序では「按手」と呼ばれているところが「堅信礼」に当たるのです。わたしたちの教団で牧師の任職式のことを「按手礼」と呼ぶことをご存じの方もいるでしょう。それと同じ「按手」です。そのとき、司式者は、「手を按いて」祈りをいたします。それは、聖霊の与えられることを求める祈りです。いいえ、祈りの言葉と共に「手を按く」とき、わたしたちは、手を按かれたその人に、今まさに聖霊が与えられていることを信じて、そのことを宣言しているのです。

堅信式は、その意味では、ペンテコステにこそふさわしいものです。洗礼式がイースターと深く結びつけられ、新しく生まれるという意味を心に刻まれるように、堅信式はペンテコステと結び付けられて、その人に聖霊が与えられ、満たされていることを確かめ合うということが、明らかにされるのです。

わたしは、牧師として、今日洗礼を受けられる人にも、堅信礼を受けられる人にも、手を按いて、聖霊の宣言をしましょう。わたしたち皆が、その人たちの中に働く聖霊を見るようになるためです。わたしたちが「ペンテコステの眼鏡」をもって確かにそのことを見るようになり、その人のうちで働く聖霊の御業をその人に代わって語るようになるためです。そのとき、その人も、自分のうちに与えられた聖霊の御業を知るようになるでしょう。確かに見るようになるでしょう。そして、自らのうちにお働きくださる聖霊の御業を証しすることができるようになるでしょう。わたしたちも皆、そのようにして、聖霊の宿る器として、神の御業を語るようにされてきた者なのです。

聖霊は、教会においでくださいました。聖霊は、一人ひとりにとどまってくださっています。聖霊は、御業の器としてあなたをお用いになられるのです。